

氏名	船津 元
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 84 号
学位記授与の日付	2023 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 4 項該当
学位論文題目	団地高齢者が「住み慣れた我が家で暮らし続ける」ための「出張暮らしの保健室」に関する研究～訪問看護師と福祉職の協働による効果的支援モデルの提案～
論文審査委員	審査委員長 森 千佐子 審査委員 鶴岡 浩樹 審査委員 贅川 信幸 審査委員 菱沼 幹男 審査委員 下垣 光

団地高齢者が「住み慣れた我が家で暮らし続ける」
ための「出張暮らしの保健室」に関する研究
～訪問看護師と福祉職の協働による効果的支援モデルの提案～

【背景】 国は高齢者が住み慣れた地域、我が家で安心して暮らし続けられる社会を目指し、地域包括ケアシステムと要となる多職種連携の構築を提唱した。こうした中、都市近郊の団地に拠点を置き、在宅医療の推進を目指し、訪問看護師を中心とした専門職によるよろず相談所「暮らしの保健室」の活動が注目され客観的な評価が期待されている。

【目的】 T市の「出張暮らしの保健室」の活動を多職種連携の一形態と捉え、実践家参画型評価であるCD-TEPの手法を用いて1次効果モデルを提案する。実践家により改善されたプログラムは、多職種の連携を高め当活動が地域医療・福祉の支援プログラムとして継続的に運営されて行くことを検証する。

【分析方法】 CD-TEP法の12ステップの6ステップを実施し、その中核となるニーズ調査、グッドプラクティスインタビュー、実践家ワークショップにより1次効果モデルを構築し、改善されたプログラムが継続的に運営されることを検証した。

【結果】 プログラムが目的を達成するためには、高齢者が「医療職と繋がる」「安心の場」「学びの場」となり「多職種が連携を強める」、「かりつけ医が参画する」5つの近位アウトカムが必要とされた。改善したプログラムは、インパクト理論、サービス利用の流れ、必要な組織、効果的援助要素を明確にし、他地域での実践を可能にするマニュアルを作成することで可視化された。多職種協働により改善されたプログラムが団地高齢者に対して継続的に実施されていることを検証した。

【考察】 改善されたプログラムは、医療職、福祉職協働でのアウトリーチ手法により団地高齢者のソーシャルキャピタルを高め、ワークショップによる対話により多職種がトランスディシプリナリチームを形成することに寄与した。高齢者のニーズに沿ったプログラムの継続は、高齢者自身が将来に対する意見を持ち住み慣れた地域で暮らし続けることへ自信を高めることに貢献すると思われる。

Research on *Shutchō Kurashi no Hokenshitsu* (Local Nurse's Office as outreach program.) for elderly people in housing complexes to continue living in a familiar home. -Proposal for effective support model through collaboration between visiting nurses and welfare workers -

[Background] The Japanese national government has advocated the construction of an integrated community care system and the necessary specialist teams' collaboration, with the aim of creating a society in which elderly people can continue to live comfortably in their own homes. Under such circumstances, there has been increased attention to the activities of *Kurashi no Hokenshitsu* general counseling rooms by visiting nurses and other professionals, which are based in housing complexes in the city suburbs and aim to spread treatment and end-of-life care at home; hence, there is a need for its objective evaluation.

[Purpose] Propose a primary effect model using the CD-TEP method, which is a practitioner-participation type evaluation, by considering the activities of the *Shutchō Kurashi no Hokenshitsu* in T city as a form of specialist teams' collaboration. We verify that the program that has been improved by practitioners enhances the collaboration of participating specialists, and that this activity will continue to operate as a community medical and welfare support program.

[Analysis method] We implemented six of the 12 steps of the CD-TEP method, constructed a primary effect model through needs surveys, conducted good practice interviews, and practitioner workshops, which are the core of the CD-TEP method, and verified that the improved program continues to operate.

[Result] It was shown that the elderly individual needed the following five proximal outcomes for the program to achieve its goals: "connection with medical professionals," "place for peace of mind," "place for learning," "strengthened collaboration of specialists," and "participation of primary care physician." The improved program was visualized by clarifying impact theory, flow of service use, necessary organizations, and effective assistance elements, and by creating a manual that enables practice in other communities. We verified that the program that was improved by specialist teams' collaboration was continuously implemented for the elderly in housing complexes.

[Discussion] The improved program contributed to the increased social capital of the elderly in housing complexes through outreach methods in collaboration with medical and welfare workers, as well as the formation of a transdisciplinary team of specialists through dialog during workshops. Continuing programs that meet the needs of the elderly is thought to contribute to increasing the confidence of the elderly to continue living in the communities where they are accustomed to living with their own opinions about the future.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規程及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	森 千佐子	高齢者支援、介護者支援、多職種連携
審査委員	鶴岡 浩樹	地域医療、プライマリ・ケア、在宅医療
審査委員	贄川 信幸	精神保健福祉、プログラム評価、支援プログラムの普及
審査委員	菱沼 幹男	地域福祉、高齢者福祉、コミュニティソーシャルワーク
審査委員	下垣 光	認知症高齢者の支援、高齢者のグループワークの方法論

2022年10月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11月26日の公開口述試験を行った。2023年2月16日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会の結果報告を受け、博士(社会福祉学)の学位を授与するにふさわしいとの提案がなされ、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2023年3月17日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

本研究は、超高齢社会の日本において、高齢者が住み慣れた地域・我が家で安心して暮らし続けるための地域支援体制の在り方に問題意識をもち、団地高齢者に対するT市の「出張暮らしの保健室」という実践に着目した。福祉実践プログラムの評価法であるCD-TEP法(Circular Dialogue between Theory, Evidence, and Practice)により可視化し、第1次効果モデルを提案することを目的としている。

CD-TEP法の方法論に則り、全12ステップのうち第1ステップから第6ステップまでのプロセスを段階的に進めている。理念を共有した多職種協働による取り組みの推進を視野に入れると、CD-TEP法を用いたことは適切であると評価できる。

先行研究から課題を整理したうえで、ニーズ調査としてのアンケート調査、グッドプラクティス事例のインタビュー調査、全6回に及ぶ評価チームのワークショップを行い、得られた量的・質的データを丁寧に分析している。ステップを踏むごとに知見が重ねられ、一定の妥当性を有する第1次効果モデルを提示しており、オリジナリティを有する。また、新宿区に端を発した「暮らしの保健室」の取り組みは全国に広がったものの、科学的検証はなされていなかった。その点を克服しようとしたことにも、オリジナリティが認められる。様々な課題を抱えた団地高齢者に、アウトリーチ的な手法でよらず相談を行う取り組みとその一般化を目指したこと、加えてCD-TEP法では必ずしも明確に位置付けられていなかった、IPW(Interprofessional work)を促進し得るとの知見を見出したことの意義は大きい。

また、エビデンスレベルを高める効果モデル形成、及び地域包括ケアシステムにおける多職種協働の

在り方に重要な示唆をもたらすものと考えられ、地域の高齢者福祉施策を科学的根拠に基づいて策定することに寄与する研究として、位置づけることができる。

今後は、類似する実践との比較研究や、今回の研究で取り上げた専門職が未配置の地域等での展開についても、波及性の観点から考察を進めることが求められる。今後、第7ステップ以降を進め、「出張暮らしの保健室」が我が家で安心して暮らし続けることにつながっている、というエビデンスが示されることを期待する。

3 最終試験の評価

研究課題は明確であり、調査により得られた量的・質的データを丁寧に分析し、ステップを踏むごとに知見が重ねられ、論述は適切である。T市における「出張暮らしの保健室」の実践を多職種協働の一つととらえ、CD-TEP法に準拠して第1次効果モデルを構築し、プログラムを可視化した。プログラム実践により、団地高齢者のソーシャルキャピタルの向上及びトランスディシプリナリ・チームの形成につながったことが示されている。福祉・医療の専門職を中心としたチームによる実践プログラムは、団地に限らず高齢者の地域生活に有効なものであると考えられ、本研究による社会的意義は大きい。今後のエビデンスレベルを高める効果モデル形成に向けた基礎を構築したこと、及び地域包括ケアシステムにおける多職種協働の在り方に重要な示唆をもたらすものと考えられる。

以上より、社会福祉学の豊かな学識、及び研究課題を科学的に追求し、社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度な実践的研究能力を有しており、審査委員全員一致で博士号授与に値すると判断した。